

昨年、我々は経営基本原則を定めました。「地域社会に役立つ」という基本理念を補強しつつ、これからの法人の進むべき方向を示したものです。その一節に「一人ひとりの意欲や自律性を高め、活力ある職場をつくっていきます」とあります。職員自身が成長できる職場であること、そして学びあい希望を語りながら実践につなげていく、そういう職場でありたいと思います。

志賀直哉が「ナイルの水の一滴」で、自分は例えて言えば「ナイルの水の一滴のようなもので、その一滴は後にも前にもこの私だけで」、「何万年経っても再び生まれてはこないのだ」と書いています。確かに人間はナイルの水の一滴ではあるが、しかし唯一無二の存在でもあり、転じて一人ひとりそれぞれの「一隅」であるかもしれないが、その「一隅」は無限に連なるものだと竹内整一は言います（「やまと言葉で哲学する」春秋社 2012年）。

福祉は小さいことのくり返しでパツとしない仕事だと思える人がいるかもしれません。確かにどんな現場も「一隅」に過ぎません。現場ではよりよく生きようとするご利用者に向き合い、それを一緒になって叶えようと日々を務めます。喜びや充実があります。それは小さな「一隅」かもしれませんが、それが連綿と重なっていけば壮大な営みにもなり得るものです。安心感や希望をもって暮らせる社会つくろうとするのが福祉の仕事の根本ではないかと思えます。

社会福祉法が改正され、この4月から施行されています。全国で施設を運営している社会福祉法人は1万8千あまりですが、改正法は経営組織のあり方の見直しや地域における公益的な取り組みを実施する責務を定めています。また社会福祉法人の活動を可視化することも課題とされました。旧態に甘んじることなく、自らを刷新しながら、この仕事の意義や価値を多くの人と共有していきたいと思えます。

(平成 29年 8月)